

82 誌上発表

『鍼道発秘』について

岩田源太郎

日本鍼灸研究会

『鍼道発秘』は、葦原英俊によって著された江戸後期の鍼術書である。本書の序跋や大浦宏勝「葦原検校の足跡」(『日本医史学雑誌』第51巻第1号)の研究によると、葦原英俊は、寛政9年(1797)に生まれ、享和3年(1803)7歳の時に麻疹により失明、岸村検校に入門し、文化12年(1815)18歳で師・坂幽玄より鍼術免許を伝授され、文政4年(1821)24歳で検校となり、天保2年(1831)34歳の夏に『鍼道発秘』を著述(天明5年〔1834〕跋刊)した。この年、將軍に御目見し、翌年から幕府の医官に登用され、奥医師にまで登りつめ、安政4年(1857)に60歳で死去している。以下、『鍼道発秘』の検討には、『臨床鍼灸古典全書』第6冊所収の京都大学富士川文庫収蔵本(シ・589)を使用した。

本書は、岡本玄治の手になる天保2年(1831)の漢文体の序文2葉、草書体で書かれた本文26葉、井田信齋と退耕老人の手になる2つの跋文3葉、計31葉で構成されている。また本文は、序論、病門、要穴、余論の4部分に分かれている。

「それ鍼のみちは」で始まる4葉程の序論では、最初に当時の鍼医に対する苦言が短く述べられ、それを論の枕として常用する鍼の種類や刺法が述べられている。苦言の対象は、竜頭際までの刺鍼、水銀を用いて長く太い鍼を刺入して筋骨を傷つけて痛みを生じさせたことを「邪氣に中った」と称することなどである。一方、葦原英俊が施術で常用する鍼は、1寸5分の毫鍼、1寸6分の員利鍼、刃先が三角形の三稜鍼の3種類で、毫鍼は管鍼術で行い腹鳴させること、員利鍼は全身に響かせること、三稜鍼は瀉血させることなどの施術の基準にまで言及して詳細である。ただし、鍼の材質についての言及はない。

「病症弁」と総称された病門42門では、概ね施術の方法や注意、選穴を述べるに止まるが、幾つかの病門では例外的に病證が簡単に解説されることもある。病門中に記載されている穴は4乃至5穴で、主に体幹の穴が多い。またほとんどの病門では、穴名を挙げず、肩・手・足などの体の各部にどの様な鍼をするかが併せて書かれていることが多い。このことは本書の大きな特徴と言える。病門と要穴に見える穴名は全部で61穴であるが、そのうち手の9穴と足の12穴は、病門の末尾に附された手足の要穴2門のみ見られる。禁鍼穴は否定されているが、これは本書に先行する菅沼周桂や石坂宗哲と同様の姿勢であって、江戸中後期において特異な考えではない。刺法では浅深、強弱、置鍼、速刺速抜などの指摘、瀉血では、少しずつ、漏らす、取るといった量に関わる記載、手技では、気を漏らす、循らす、補う、修めるなどの記述が見られる。ちなみに、気を循らすということについて、稲妻のごときものという記載も見られることから、現代で言う鍼の響きが意識されていた可能性がある。なお、灸法では、壮数等の記載は一切見られなかった。

余論には、刺入時の注意、返し鍼、鍼法の心得、脈状と施鍼の関係、治療者としての態度などが書かれている。脈状と施鍼の関係については、脈状が浮数、浮速の場合は浅く速く行い、沈遅の場合は深く留めるとしている。さらに、前述した施術に常用する3種の鍼の役割について、毫鍼は大補、員利鍼は補瀉、三稜鍼は大瀉、というように、補瀉の使い分けを明確にしている。

本書は、江戸中期後半から後期にかけての鍼灸の傾向をうかがう上において、菅沼周桂の『鍼灸則』、石坂宗哲の『鍼灸説約』などと併せ読まれるべき重要な資料である。また、病門中に体幹部の穴が多く、手足の穴の記載が少ないことは、施術における経脈の軽視の反映とも考えられる。なお、序論に見える苦言や批判については、現代にも通じるものがある。